CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[書評] 杉原四郎著『マルクス経済学の形成』

著者	服部 文男
雑誌名	關西大學經済論集
巻	14
号	3
ページ	367-374
発行年	1964-09-20
その他のタイトル	[Review] Shiro Sugihara ; The Formation of Marxist Political Economy, 1964
URL	http://hdl.handle.net/10112/15397

書評

杉原四郎著『マルクス経済学の形成』（一九六四年　未来社）

服部文男

マルクス経済学そのものの形成過程の学説史的ないし思想史的研究の必要性がとみに強調されてきた今日、かつて『経済セミナー』誌上に「基礎講座・マルクス経済学」として一二回にわたって連載された杉原四郎教授の労作が一書にまとめられるにいたったことは、まことに時宜を得たものということができる。雑誌に発表中すでに、理論あるいは学説史・思想史の研究者の注目するところであったことは、評者の甚だ狭い見聞の範囲ですらもかなりの事例を挙げて示しうるのであるが、このたびあらためて前後一貫して通観しうるかたちに整えられたことにより、その価値はますます大きくなったといってよい。

著者は「はしがき」で、マルクス経済学の把握のためには、『資本論』そのものの理論的研究のみでは不十分であって、『資本論』体系の形成過程をマルクスおよびエンゲルスの「基本的問題意識や分析視角の推移をふくめて」思想史的にあとづけることが必要であると述べ、さらに、「現代の時点からするマルクス経済学への正しい評価となされるべき発展の方向づけ」は、かかる思想史的研究を通ずるマルクス経済学の内在的理解の上にのみ可能であると記して、本書の意図と課題を明らかにしている。

何よりも本書の特色は、マルクス経済学の「形成」過程、すなわち著者によれば「定礎・確立・完成・発展」の過程が、広汎な文献渉猟（特に最近の諸研究の成果の総括ならびに最新の

資料の利用）と周到な思想史的把握（とりわけ同時代の諸事件ならびに諸思想との関連づけ）とによって解明されている点にある。しかも、原型に随処で補訂が施され、新たに巻末には人名索引とともに簡にして要を得た年表が添えられて、叙述の正確さと利用の便宜とがいっそう増大していることも、特記すべきであろう。前者の一例を挙げれば、第八章以降の『資本論』体系の理論構成の検討に際して、「巻」を「部」に改めてマルクスの理論体系の内容を理解しやすくしたことは、訂正の不徹底・不適切な点が散見するとはいえ、適切な配慮というべきであり、後者に関しては、著者の綿密さをまってはじめて作成可能なものであり、その労苦を多としたい。叙述はまた平明達意であって、当初の発表の目的によって著しく制約された形式と紙数のうちに、マルクスならびにエンゲルスの壮大深遠な思想体系を、できる限りその全域に眼をくばりながら、正当な均衡と比重においておさめようとする努力が払われている。そして、マルクスならびにエンゲルスの人間像に寄せる著者の傾倒の程は、節度ある表現ながら読者の胸に深い共鳴をよびおこすことに成功しているといってよい。

以下においては、本書の内容についての紹介は省略して、重要と考えられる諸点につき評者の見解を述べることとする。著者自身もいうように、この種の研究は内外ともにきわめてまれである。従って、専門分野・隣接領域の研究者相互の率直な意見の交換が甚だ必要であるように思われる。先学によってきり拓かれた途を共にさらに前進するための一提言として受取られるならば幸いである。

一　四〇年代のマルクス経済学

「結言」にも、特に初期マルクスについては、最近の成果の摂取に努めるとともに、限られた紙数の中にいかなる展望を与えるべきかに本書中最大の苦心が払われたと語られているが、マルクス「経済学」の形成という主題に制約されたためか、「哲学的研究から経済学的研究へ」という把握によって、事態がいくらか単純化されているように感じられる。もちろん、著者の真意は、マルクスならびにエンゲルスが従来の「哲学的意識」の自己批判を遂行した点に彼らの経済学の「定礎」を見出そうとするにあるが、特にマルクスの場合、その革命的民主主義から共産主義への移行の過程は、同時に、観念論から唯物論への移行の道程でもあったことが強調されねばならない。従って、マルクスとフォイエルバッハとを分かつ決定的一点＝「政

治」との結合こそは、一方では「経済学」への下降の起点をなすと同時に、他方では「哲学」を真理たらしめるものでもあったのである。

ところで、『経済学・哲学手稿』における「労働疎外論」については、著者は逆にマルクスの哲学的見地に重点を置いているかに見える。少なくとも、マルクスによるヘーゲルの労働観の批判と摂取を論じているところでは（五二―三ページ）、「ヘーゲルは近代国民経済学の立場に立っている」とするマルクスの含意を重視する必要があるように思われる。私見によれば、『経済学・哲学手稿』において最も注目しなければならないのは、マルクスによってスミス蓄積論の根本的批判が行なわれている点であるが、かかる「経済学批判」の基軸こそが「疎外された労働」なる概念にほかならず、これとの関連において哲学一般とりわけヘーゲル弁証法に対する批判がなされているのである。『手稿』の「序文」でマルクス自らヘーゲル哲学批判を「終章」に置く意図を明らかにしていたことから、この部分を国民経済学批判から切りはなして考察する傾向が内外ともになお支配的であるが、『経済学・哲学手稿』を「経済学批判」の視角から把握し直すことが必要である。

著者によれば、『手稿』における労働疎外論はなお哲学的色彩が強いので、これを資本主義分析と結びつけるためには、「一歩具体化して社会科学一般の基礎理論たらしめておく」必要がある。そこで、マルクス自身も、賃労働という労働疎外の特殊歴史的形態の解明のために、「労働の疎外が一般にどうして起こらざるをえないか」という問題を解決する必要に迫られて、労働の「質的疎外」の側面では分業論を、「量的疎外」の側面では時間費用論を、ともに極めて萌芽的ながら『手稿』のなかで説きはじめているというのである。後者の問題は、本書の基底を貫く著者の特異な見解を形づくる重要な点であり、「量的疎外論」＝「労働時間論」＝絶対的剰余価値論から、さらに「経済本質論」＝「時間節約」論にまで展開されるものであるので、後段であらためて関説したい。

さしあたり「質的疎外」についてみるならば、著者は『ドイツ・イデオロギー』において労働疎外論が史的唯物論に発展させられたとみなし、『手稿』の段階においては「人間本質論から一足とびに賃労働者論をとりあげていた」（六一ページ）としているが、この時期のマルクスは、むしろ、国民経済学批判を通じてブルジョア社会の労働疎外なる事態を明らかにしてい

たのであり、その上で分業論（および交換論）の展開を試みようとしたのではなかろうか。

さらに、マルクスの労働疎外論が著者のいわゆる「量的疎外」の問題よりも「質的疎外」の側面に傾斜していたことの理由として、四〇年代には大陸諸国がマニュファクチァ段階にあったことが挙げられているけれども、これまたこの段階のマルクスのブルジョア社会批判の視角との関連においてとらえられるべきものであり、従ってその現実的基盤としては、イギリスにおける機械制大工業とその上に展開される労資の階級闘争の形態とが問題とされるべきであろう。かつて著者によって論及された一八四七年イギリスの一〇時間労働法に対する当時のマルクスおよびエンゲルスの評価と後年第一インターナショナルに拠っての彼らの評価との差異をめぐる問題にしても、かかる理論＝思想史的観点のもとにあらためて検討されるべきではなかろうか。そして、このことが、著者のいう「恐慌と革命の経済学」の理論的内容ならびに基本的性格をいっそう明確にすることを可能にするのではなかろうか。

二　『経済学批判』と『資本論』

第五・六・七章は『経済学批判』を扱い、第八・九・一〇章は『資本論』を対象とし、合わせて本書の中心的部分をなすが、それぞれの成立過程の叙述は、これまでの内外の研究成果の明快な整理と新全集の利用とにもとづいてなされており、特に当時の国際的情勢ならびに階級闘争と結びつけてマルクスならびにエンゲルスの理論的・実践的活動が簡潔に描き出されている。

第七章「『経済学批判』体系の論理構造」では、著者は、「価値・剰余価値論と労働疎外論との関連を重視するわたしの立場からとくに重要と思われる一つの論点」として、「真の富＝自由に処分しうる時間」という『経済学批判要綱』にみられる問題を論じている。すなわち、労働時間は、生活時間のうちで人間の全面的発達の基礎たる「自由に処分しうる時間」にくいこむという意味で「人間にとっての本源的コスト」をなすがゆえに、「時間節約の法則」は「労働配分の法則」とならんで、「人間にとっての第一義的重要性」をもつというのである。著者によれば、この点こそ、さきの「労働の量的疎外」の問題として、マルクスの価値・剰余価値論および資本蓄積論をして客体的認識のみならず主体的把握たらしめている「基礎視点」なのである。

さらに著者は、かかる超歴史的ともいうべき「経済本質論」的考察に対して加えられるべき批判を十分に予想しながらも、「資本主義体制が他の社会体制に対して有する共通点と差異点、その意義と限界とは、これを経済一般に通ずる基本法則にてらして考察することによってはじめてあきらかにすることができる」と主張している。ここには、著者の基本的見解が端的に表明されていると考えられるのであるが、「経済一般に通ずる基本法則」そのものが、他ならぬ資本主義的経済構造の分析を通じてはじめて明らかにされえたことが軽視されているのではなかろうか（「マルクスがなしとげた巨大な前進は、まさに彼が、社会および進歩一般にかんするこういう議論をすべてすてて、そのかわりに一つの社会と一つの進歩の――すなわち資本主義的社会と資本主義的進歩の――科学的な分析を与えたところにあった。」〔レーニン『「人民の友」とはなにか』第一分冊〕）。

著者によってはじめて匿名の一パンフレットの筆者たることが明らかにされたディルクの「富とは自由に処分しうる時間である」という言葉を高く評価したマルクスの真意は、リカードが真の富はできるだけ多くの使用価値ができるだけ少ない価値によって生産されることにあると述べているのに対し、これもまた「自由に処分しうる時間」＝「真の富」であるが、しかし資本主義的対立におけるそれであるということを明らかにした上で、ディルクがこの対立をアウフヘーベンしていることを示すにあった（『剰余価値学説史』第三部第二一章「経済学者に対する反対〔リカード理論を基礎としての〕」参照）。『経済学批判要綱』においても、資本主義のもとでは「自由に処分しうる時間」＝剰余労働であることが明らかにされた上で、資本主義がアウフヘーベンされて、生産力の発展がなされると、労働時間の節約により、従前以上の「剰余」生産物のほかに、直接に生産的な労働に費されることのない享受のための時間が得られることが示されているのである。

もとより著者は、他の論文において、「自由時間と労働時間との対立の止揚が現実に実現されるのは、階級対立そのものの止揚の実現をまってはじめて可能」であると述べ、「階級社会にとって本質的な労働時間と自由時間との対立が、資本主義社会にいたって最も尖鋭化する」ことを明らかにし、ここにマルクスの「経済本質論と剰余価値論との連繋」を把握すべきであると強調している（本誌第一三巻第一・二合併号所載「マルクス

の経済本質論に関する一考察」）。しかしながら、階級対立止揚の前と後とにおける「自由時間」の形態の本質的差異を明確に規定することなしに、両者を「経済的本質論」の見地のもとに一括するならば、マルクス経済学、とりわけその基軸をなす労働疎外論の基本的性格はかえって不明確なものになってしまうのではなかろうか。

三　晩年のマルクスならびにエンゲルスの経済学

第一一章では、特に『資本論』第一巻刊行以後のマルクスの研究活動が、エンゲルスの協力活動をも含めて、述べられている。なかでも第二節「改良主義的諸思想への批判」では、六〇年以降マルクス主義の立場からの批判の対象となった経済思想として、ミル、ラッサール、デューリングの三者が挙げられているが、「イギリスの労働運動の改良主義的傾向の思想的支柱」たるミルについての叙述は、『ミルとマルクス』の著者としては当然のことながら、後二者に比して従来ほとんど看過されていただけに、独自の意義を有している。また、ラッサール批判が『資本論』第三部第五二章「諸階級」のなかでなされる予定であったという著者の推定は、甚だ示唆に富んではいるが、一八六八年一月二五日づけのエンゲルスあての手紙そのものをこのような推測の根拠となしうるであろうか。

第一二章「晩年のエンゲルスの諸業績」では、マルクス死後エンゲルスに課せられた理論・実践の両面にわたる仕事について語られている。第二節「独占資本主義段階の諸現象の研究」においては、一八九一年のドイツ社会民主党綱領草案に対するエンゲルスの批判に触れて、資本主義が独占段階に入ったことが把握されえていた点の指摘がなされている。ただし、エンゲルスが「資本主義的私的生産の本質に根ざす無計画性」という草案の字句に対して「私的」という語の削除を主張したことについての著者の解釈は、エンゲルスの趣旨を正確に伝えているものとはいいがたい。著者は、「資本主義的私的生産」を「資本主義の本質に根ざしている私的生産」といいかえた上で、その意味するところは「生産手段の資本制的私的所有に基く生産」という本質的な事態なのであるから、「個々の企業家による生産」という現象的な意味にとられやすい「私的」という修飾語は除かねばならないとエンゲルスの指示を解釈しているが、エンゲルスは端的に、株式会社・トラストでは「私的生産」はなくなるのだから、「私的」という語を削除すべきであ

ると主張しているのである。いいかえれば、エンゲルスは、生産はますます社会化されてゆくのに対して領有が資本主義的私的形態のもとにあるという根本的矛盾の把握を根底にすえつつ、右の批判を展開しているのである。このことについては、『空想から科学へ』中の周知の命題――「社会的生産と資本主義的領有との間の矛盾」＝「資本主義的生産様式に内在する矛盾」＝「根本的矛盾」ならびにその現象形態の一つたる「個々の工場内の生産の組織性と、全社会における生産の無政府性との間の対立」を想起すべきである。特にこの論点は、現代資本主義論ないし国家独占資本主義論にかかわるものでもあるから、右の「矛盾」を厳密に規定しておくことが必要であろう。

以上、著者の論旨を追った批評を行なう余裕もないまま、問題点の摘出のみに終ってしまった。著者の見解のいっそうの展開が期待される論点も見出されたし（たとえば、一八三ページの『資本論』の論理的展開について）、思想史的見地からは当然論及されるべきであった問題もあった（たとえば、プロレタリアート独裁論と経済学との関係）。これらについては、さいわい、著者には『ミルとマルクス』なる著書があり、とくにその第一部「マルクス経済学の基本性格」に含まれる四論文は、本書の原型をなすものと思われるし、『マルクス経済学ノート』の訳者解説は、マルクスの初期の経済学研究についての本書の叙述の理解に役立つであろう。また本書の基底をなす著者独自の経済本質論については、本誌上にすでに「マルクスの経済本質論に関する一考察」なる論稿が発表されている。評者は執筆に当たり、あらためてこれらの著書・論文等を通読し、多くの啓発を新たに受けることができたし、特にこれまで意識していなかった諸点につき貴重な問題提起に接し得たのであるが、同時に、いくつかの根本的論点に関しては疑問を解消させることができなかったことを表明せねばならない。著者の真意を誤解している点も多いと思われるが、率直に右の諸点を記し、著者の御教示を乞うとともに、著者によって提起された問題を正しく受けとめて、マルクス経済学の形成過程の研究をいっそう精密化することに努めたいと思う。

（一九六四・七・二〇）

〔付　記〕

極めて些細な事項であるが、若干の指摘をしておきたい。

杉原四郎著『マルクス經濟學の形成』（服部）

(1) 著者は、雑誌発表のさいには「カール・ハインリヒ・マルクス」と記していたものを、本書では「ハインリヒ・カール・マルクス」と改めている（一五ページ）。通例は、前者が用いられているが、エンゲルス執筆の『国家科学辞典』の項目は Marx, Heinrich Karl となっているので、著者はこれにならったのでもあろうか。他の人名との統一をはかるためにも、前者に改めるべきではあるまいか。

(2) Trier については、著者はトリアーと表記している（三二ページ）。この種の表記には特有の困難がともなうとはいえ、トリーアないしトリールの方が無難ではなかろうか。

(3) エンゲルス伝の著者ステファーノワとあるのは（八三ページ）、ステパーノワと改めるべきである。

(4) 一五九ページの一八六七年四月三〇日づけマルクスのS・マイヤーへの手紙の引用中、「第一部」は「第一巻」、「第二部〔第二、第三巻〕」は「第二巻〔第二、第三部〕」、「第三部〔第四巻〕」は「第三巻〔第四部〕」にそれぞれ改める方が適当であろう。

一六〇ページの新版『剰余価値学説史』の表題の下の「『資本論』第四部」は「『資本論』第四巻〔第四部〕』」とする方がよいのではないか。

(5) 『資本論』第一巻の第二版の構成につき、七篇二四章と記されているが（一九八ページ）、七篇二五章とすべきではあるまいか。『資本論辞典』の六八五ページにも、第一巻第二版は七篇二四章とされているが、評者の手許にあるコルシュ版に拠るかぎり七篇二五章である。

執筆者紹介

高木秀玄　本学経済学部教授

越後和典　本学経済学部教授

神保一郎　本学経済学部助教授

小杉　毅　本学経済学部助手

服部文男　東北大学経済学部助教授